

Aさんとの日常生活で見えてきたものから支援を考える

げんきの家生活介護事業所
支援員、看護師、作業療法士

1. はじめに

重度な障がいを持つなかまは実に様々な方法で私達職員に「意思」を発信してくれる。それは表情や息遣い、バイタルサイン、身振り手振りや発声などである。その「意思」を職員がいかにキャッチできるかが「意思決定支援」であるが、そのキャッチは各々の職員の主観に委ねられているのが現状だ。今回は、「意思」をキャッチするための日々の観察と、観察から見つけた「意思」、見つけた「意思」を元にした日々の働きかけについて記述する。

2. 実践のきっかけ

今回の実践のきっかけは、新人職員の一言からだった。「私が感じ取っているAさんの意思是、先輩方が感じ取っているものと同じかどうか分からない」というのだ。Aさんは2年前に当施設の利用を開始されたなかまである。利用前にお母さんからAさんの好きなこと等は伺っており、それをヒントに活動に取り組んでいたものの、2年たった今でも、Aさんの意思が捉えづらい場面があった。職員間でAさんの言動について「こうであろう」という仮説はいくつもあったが、客観的に捉える取り組みは今までになく、今回は改めて、Aさんの生活場面における言動を観察し、「意思」を捉えようということになった。

3. Aさんの紹介

Aさんは黒髪のショートカットが似合う30代の女性である。笑顔が素敵で、喜んだり怒ったりする時は手足をバタバタさせて全身で表出してくれる。最重度の脳性麻痺で、生活全般に介助を必要とされているが、ご自身で寝返りをして移動したり、歩行器（SRCウォーカー）では足で床面を蹴り前に進むことができる。食事は経管栄養が主であるが、ご家族の意向で味を楽しむ程度の経口摂取も続けている。話しかけると視線をこちらに向けたり、顔を上げてくれる。普段は「んー」と小さな声で発声があり、喜んだり怒ったり感情が高ぶると声量が大きくなる。音楽や散歩が大好きな方である。

4. 利用開始時にお母さんから得ていた情報

好きなこと：音楽…ディズニーの曲、スマップ、ライオンキングの映画

あそび…ブランコやトランポリン等揺れる遊び、ピカピカ光るものを見る

食べ物…プリン、甘辛い味の物

他…歩行器（SRCウォーカー）で移動すること、ドライブ

苦手なこと：酸っぱいもの

天気や生理の状態により気分がむらがる。

他：声に特徴のある人に反応がある、色々な表情をする、好き嫌いがはっきりしている。

5. 生活場面における A さんの言動の観察

まずは A さんの意思がどのように表出されているのかを明確にし、どのような刺激から表出が引き起こされているのかを検討するため、いつどんな場面でどんな表出があったのかを 2 週間にわたって観察、記録した。

1) 好き（快）、いや・嫌い（不快）の表出

好き（快）	いや・嫌い（不快）
<ul style="list-style-type: none"> ・笑顔 ・顔を上げて両手を叩く 	<ul style="list-style-type: none"> ・手足をバタバタさせる ・鼻を鳴らすように発声する ・手を引っ込める、体を丸める

2) 表出があった環境と A さんの表出

	表出があった環境	A さんの表出
朝の会	・ A さんが当番で、朝の会にて職員と一緒になかまの名前を呼ぶ。	<ul style="list-style-type: none"> ・顔を上げる・両手を叩いて笑う ・目線を上げてなかまの顔をちらっと見る ・顔はうつむき、発声なく表情硬い。
	・朝の会で連絡ノートに書いてあったお母さんからの一言を読み上げる。	<ul style="list-style-type: none"> ・両手を叩いて笑う
	・名前を呼ばれる。	<ul style="list-style-type: none"> ・顔を上げることもあるが、上げないこともある。 ・じっと動きをとめる。
音楽	・他のなかまが聴いている音楽や音が流れる（童謡、ビートルズ、ジブリ、ブルースリー、マラカスの音、あいみょん、クイーン、カーペンターズ）	<ul style="list-style-type: none"> ・足を座面に乗せ、両手を叩く。 ・顔を上げて笑う。
	・他のなかまが聴いている音楽が流れる：ジャズ	<ul style="list-style-type: none"> ・両手を叩いて「んー」と発声。 ・表情は硬い。
	・音楽が A さんの近くで大きな音で流れている。	<ul style="list-style-type: none"> ・両足を座面に上げ、両手を叩いて怒っている。
バイタル測定	・バイタル測定時に腕を伸ばす。	<ul style="list-style-type: none"> ・手足をバタバタさせ、鼻を鳴らすように発声。
	・バイタル測定をすると声かけをして上着を脱がせる。	<ul style="list-style-type: none"> ・顔を上げ、鼻を鳴らすように発声。 ・手を上下に振って怒る。
活動	・班活動で、音声のみで色の選択をしてもらう。	<ul style="list-style-type: none"> ・表情を変えずじっと見つめている。
	・作業活動において、実物を見せてやり方を説明。その後一緒に道具	<ul style="list-style-type: none"> ・手を引っ込めずに、じっと道具を見ている。

	を持ち作業を行う。	
	・同じ作業を何回も繰り返し行う。	・はじめは作業を見て、職員と一緒に 行っていたが、途中から表情が陰 しくなり、「がー」と声を上げて怒っ ている様子。
	・職員が、Aさんの隣で横になっ ているなかまのストレッチを行っ ている。	・うつ伏せで顔を少し上げ、「んー」 と発声。表情は硬い。
	・話し合いの時に、職員が他のなか まや職員と話している。	・両足を座面に上げ、両手を組んで 怒る。
食事	・おやつジュースの匂いを嗅いで もらう。	・上を見上げて笑う。
	・おやつ、昼食を待っている。	・足を座面に上げ、両手をこすり合 わせて怒っている。 ・鼻を鳴らして発声。
	・おやつを摂った後車いす座位でい る。	・両足を座面に上げて、鼻を鳴らす ように発声し怒る。
トイレ	・トイレをすることを声かけをし てから、体勢を変える。	・「んー」と発声し笑顔。 ・体勢を変えることに抵抗し、顔を 紅潮させて怒る。
	・オムツを交換する際に、職員がA さんの足を伸ばそうとする。	・足を伸ばすことに抵抗する。
その他	・登所時に屋外から屋内に入る。	・顔を紅潮させて怒る。
	・入口近くに車いす座位でいる。	・顔を上げ両手を叩き笑顔。

6. Aさんの表出の分析

1) まず、Aさんが「好き(快)」「いや・嫌(不快)」を表出する環境について検討した。

好き(快)	いや・嫌い(不快)	分からない
<ul style="list-style-type: none"> ・音楽：童謡、ビートルズ、ジブリ、ブルースリー、マラカスの音、あいみょん、クイーン、カーペンターズ、ディカペラ ・おやつや食事を摂る。 ・お母さんの話をする。 ・これから行うことを具体的に説明してから行う。 ・風を感じる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・おやつや昼食を待つ。 ・おやつや昼食が終わる。 ・これから行うことを声かけせず、また同意を得ずに行う。 ・同じ作業を続けて行う。 ・音量が大きい音楽。 ・屋外から屋内に入る。 ・音声のみで選択をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・音楽：ジャズ ・朝の会での当番、挨拶

2) 次に、AさんのYes/No表出について検討した。

Yesだと思われる表出	Noだと思われる表出
<ul style="list-style-type: none"> • 顔を上げる。 • うんうんと頷く。 • 職員の手を触ってくる。 • 「んー」と小さな声を出す。 	<ul style="list-style-type: none"> • 顔を上げずに俯いている。 • 手を跳ねのける。 • 腕を曲げて体を縮める。 • 「カー」と威嚇したように声を出し、手足をバタバタさせる。

7. 観察後の生活場面における具体的な支援とAさんの表出

1) 6の分析を元に支援の仕方を検討した。

- ①Aさんと何かを行う際は、今から何をするのかをなるべく具体的に声かけをする。
声かけ後にAさんが同意しているかを(Yesだと思われる表出があるか、もしくはNoだと思われる表出がないか)確認してから支援をする。今行っていることを終了する際も同様。
- ②嫌がることがあった際は、今から行うことを再度声かけする、もしくは時間をおいてから声かけを行う。
- ③Aさんに待ってもらって時間が長くなりそうな場合は、今準備していることや他のなかまの次にAさんのところに行くなど、見通しが持てる声かけをする。
- ④選択をしてもらう場面では、なるべく実物を見てもらったり、匂いを嗅ぐなど聴覚以外の選択肢を提示するようにする。
- ⑤Aさんの自発的な動作になるべく沿う形で支援をする(寝返りやトイレ、移乗支援など)。
- ⑥Aさんと音楽を楽しむ際は、好きなジャンルを選択し、音量が大きくなりすぎないように注意する。

※⑤、⑥についてはAさん特有

2) 具体的な支援場面とAさんの表出

	場面に応じた支援	Aさんの表出
音楽	<ul style="list-style-type: none"> • 音楽の趣味が合うなかまに好きなジャンルの音楽を流してもらう。 	<ul style="list-style-type: none"> • じっくり音源の方を見たり、時に笑顔で両手を叩く。
バイタル測定	<ul style="list-style-type: none"> • 測定前に声をかけ、手を触っても抵抗がないようなら測定を開始する。 	<ul style="list-style-type: none"> • 怒らずにバイタル測定ができる。
	<ul style="list-style-type: none"> • 実物を見たり触ったりして選択してもらう。 	<ul style="list-style-type: none"> • 匂いがあるものは選択しやすいが、視覚での選択は表情を変えずじ

活動		っと見つめている。
	・作業活動において、実物を見せ何をするのか声かけをしながら一緒に手を取り行う。	・手を触られても怒ることが減り、作業時にご自身で手指を動かすことが増える。
食事	・おやつや食事は、パッケージを見せたり匂いを嗅いでもらって選択をしてもらう。	・撮りたいもので表情を変える。
	・準備などで待ってもらえる際は「今スープを作っていますよ」等と状況を声かけする。	・怒らずに待ってもらえる。
	・おやつや食事を終わる際は声かけし同意を得る（どうして終了するのか、次のおやつを楽しみにしてもらうように声かけする）。	・おやつや食事後も怒らずに過ごせる。
トイレ	・うつ伏せから仰向けになってもらいたい時は、腰付近を軽くトントンと叩き「トイレをするので上に向きましょう」と声かけし、Aさんが腰を浮かすようなそぶりが見えたら体勢を変える。体勢を変える際に抵抗する様子があれば、再度声かけから行う。	・怒らずに体勢を変えることができる。
	・オムツをとるまでは足は挙げたままにしたい傾向にあるため、そのままの体勢で行い、オムツを装着する際に足を伸ばすようにする。	・スムーズに足を伸ばすことができる。
その他	・屋外から屋内に入る際は「中に入りますよ」もしくは「今から〇〇があるので中に入りましょう」と声をかけてから入る。	・怒らずに屋内で過ごせる。
	・風がある日は、入口付近にいる。	・一人でいても機嫌よく過ごせる。

8. 観察・分析から得られた支援方法を実践してみよう

Aさんが利用を開始した当初は、Aさんを怒らせることが多かったように思う。今から行うことをきちんと説明する、選択をする際はAさんの様子を見て汲み取る等支援の基本を行っていたものの、どのようなことが好きなのか嫌いなのか、YesやNoはどのように表出されているのかを丁寧に分析していなかったために、Aさんの意思に沿わない支援を行っていたのではないかとと思われる。もともと笑ったり怒ったりと意思を素直に表出してくれる

A さん。今回、A さんの表出とその環境を客観的に観察し、支援方法を模索したことにより、A さんがどのような気持ちでいるのか、また同意しているのかをより丁寧に観察し、A さんの支援を行えるようになってきたように思う。結果、A さんが支援の中で怒ることが減り、手を自ら動かしたりと自発的な動作がみられることから、これまでより A さんの意思に近い形で支援が行われているのではないかと考える。

9. 今後の課題

現段階での課題は、挨拶や Yes・No の表出がまだ捉えきれていないことにある。原因としては、得意なことや好きな物・こと、また苦手なことや嫌いな物・こと、Yes や No の表出についての情報量がまだまだ少ない点が挙げられる。この情報量の少なさにより、活動場面で A さんの本当の「意思」「やりたいこと」の幅を狭めている可能性がある。今後も引き続き、日々の生活場面における小さな気づきを記録、検討し、A さんとのやり取りをする中で A さんの「意思」を確認していく必要があると考える。

10. おわりに

A さんの「意思」を生活場面の観察から捉え、それをもとに支援を行ってきた。今まではなんとなく「こうではないか」という職員各々の主観で支援していたが、A さんを取り巻く環境と言動を客観的に観察していく中で、A さんの「意思」に基づいた支援を自然と実践していたように思う。「意思」を捉えることは難しいように思うが、実は単純なことなのだと思う。なかまの「伝えたい」と、職員の「知りたい」が合致した時に「意思」を捉えることができるのではないだろうか。びわこ学園医療福祉センター草津の口分田施設長（両親のつとめ 第 742 号より）は「重症心身障害児・者の人格は、まずはそのままの『いのち』の中にある。笑ったり、泣いたり、おびえたり原初的な情動の表現の中にある。そして、人との関わりの中で、お互いが見つめ合い、触れ合い、感じ合う中で内なるものが他者の働きかけに触発されて、生まれてくる共感の中にある。関わりの中で、間柄が生まれ、お互いに相手に感じるかけがえのなさが人格と言える」と述べている。また「自己と他者の協働は、関わろうとする支援者の姿が他者の心に映し出され、他者は新しい自己の可能性を実現していく。支援者もそうした自己実現している相手の姿を自己の心に映し出すことによって、支援者としての新たな自己の可能性の実現を実感する。これは他者実現を目指す眼差しの中で、お互いの自己実現が創造されたことになる。」とも述べている。なかまの「意思」を捉える努力が、実は自分たち職員の働く、生きることにつながっているのだと気づかされた。これからはなかまからの小さくも大きい「意思」を「知りたい」と思う気持ちを大切に働いてゆきたい。